

第27回全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会

見所3

組手高校生無差別級（選抜・推薦4名）

選抜・推薦された野原、今津、伊藤、安岡は、全員小学生からJTAに入門し、中学入学時も持続してJTA七大精神を涵養した現在、青年期に至り立派に成長している姿が何よりも嬉しい。彼らが所属するクラブ長の指導の賜である。高校卒業後も持続的に努力すれば、将来、必ずこの中から「フルコンタクト・テコンドー王者」が誕生するだろう。伊藤岳陽（名古屋天白テコンドークラブ）が頭一つ抜けて優勢である。対抗は公式戦1勝1敗のライバル、野原颯太（長崎佐世保テコンドークラブ）である。



伊藤岳陽

今年こそは、優勝を狙って頑張ります。

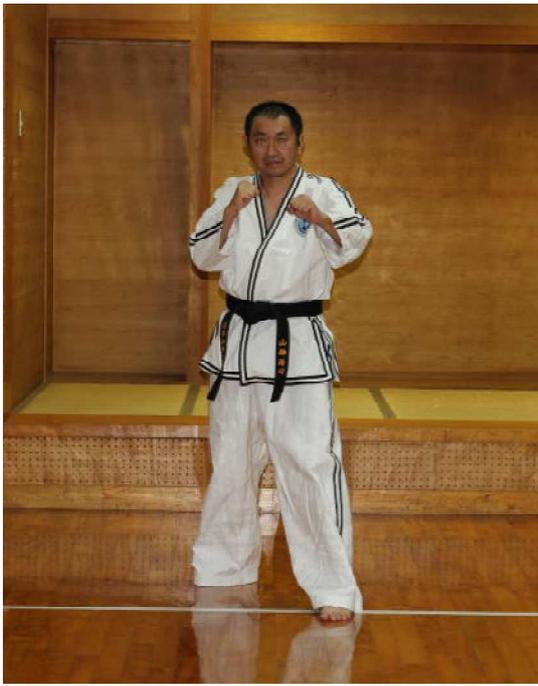


野原颯太

昨年の全日本大会での悔しい気持ちを思い出して今年こそ良い結果を残します。

組手壮年部無差別級（選抜・推薦4名）

4年目を迎えた壮年部組手は、引退や怪我による欠場により4名が選抜・推薦された。3連覇を狙う宮城良太（神戸六甲テコンドークラブ）は、本年度、予選会に参加しておらず仕上がり状況が不明である。（来年度からは、壮年部組手で優勝しシード権を獲得しても、安全上、予選会関西大会参加が義務づけられる）。悲願の初優勝を狙うのが、軽量ながら関西大会壮年部無差別級を制した原 浩之（湘南平塚テコンドークラブ）である。4大会連続出場の「壮年部組手の主」、山脇浩司（高知香南テコンドークラブ）の気合い組手にも期待したい。



山脇浩司

3度目の出場になります。今年もこの大会に向けて、日々練習をして参りました。成果を発揮する日です。精一杯頑張ります。



原 浩之

優勝めざして頑張ります。

組手B級男子無差別級（選抜・推薦11名）

組手B級男子無差別級は、J T A入門4年未満の発展過程にある若手選手、とりわけJ T A加盟の大学体育会テコンドー一部員を主とする新人戦の位置づけである。大部分の選手が大学入学後にはじめる大学アメリカンフットボール界同様、努力すれば全日本大会に出場できるという意味で、大学競技武道界では唯一の「機会ある階級」といえる。B級でキャリアを積んで優勝・準優勝し、ノー・ヘッドギアのA級へ昇格することが望ましいあり方である。本年度、全日本大学大会重量級で優勝した尾崎秀磨（神奈川大学体育会テコンドー部）が優勢である。対抗するライバル・前橋拳史郎（岡山大学体育会テコンドー部）を破った際、警察への就職が決まっていることから「凶悪犯を逮捕する気合いで戦いました」というメンタルも注目したい。小学生の頃に入門した生え抜きで蹴美力に秀でた選手に成長した三富湧太（湘南平塚テコンドークラブ）にも注目したい。



尾崎 秀磨

大学生生活の4年間もあっという間でした。そして、いよいよ大学生で最後の大会を迎えました。来年からは社会人として厳しい世の中に一步踏み入れることとなります。ですから、学生最後の節目として、全日本大会を全てを出し切って一生懸命頑張りたいと思います。



前橋拳史郎

全日本大会という素晴らしい舞台に今年も出場できることを本当に嬉しく光栄に思います。個人組手は大学4年間の集大成を見せれるよう最後の1秒まで自分を出し切りたいと思います。団体型はメンバーと気持ちと呼吸を揃え最高の蹴美ができるように頑張ります。テコンドーができることに感謝して挑戦していきます。宜しくお願いします。

組手B級女子無差別級（選抜・推薦7名）

本年度から女子無差別級組手も、男子同様、A級とB級にわけられた。女子の場合は、年齢を問わず社会人からはじめても、努力すれば全日本大会に出場できるという位置づけである。男子B級同様、キャリアを積み、優勝・準優勝した後、A級へ昇格することが望ましいあり方である。鈴木美祐（神奈川大学体育会テコンドー部）と小出ゆき（横浜市立大学体育会テコンドー部）が優勢である。大学体育会卒業後も、持続的に努力している角田知美（武蔵小杉テコンドークラブ）にも注目したい。



角田 知美

組手は1本でも多く素敵な蹴りをきめられるように、団体型は根塚・武田初段と三姉弟の蹴美を見せつけられるように、一生懸命頑張ります。

組手中学生女子無差別級（選抜・推薦2名）

福島良菜（福岡筑紫野テコンドークラブ）がやや優勢であるが、本番で実力が発揮できないことがあり、渡 巡来（長崎佐世保テコンドークラブ）にも十分優勝の可能性はある。



渡 巡来

日々の努力の成果が出せるよう頑張ります。

組手中学生男子無差別級（選抜・推薦5名）

組手中学生男子軽量級級（選抜・推薦3名）

中学生男子は、成長の時期の格差が顕著である。

かねてより身長と体重に基づく階級制を計画していたが、本大会ではじめて実現した。

選抜・推薦された全員が小学生低学年からJTAに入門し、中には5歳からはじめている生え抜きの少年達である。

青年期もJTA日本跆拳道を持続し、大会で入賞しながら「自信の積み立て貯金」をした方が、高校受験・大学受験等で成果を発揮できると思われる。とくに思春期は嫌なことに過敏に反応するのだが、幼い頃から持続してきた日本跆拳道の道場で汗を流すことで精神が安定する効果が高い。

（義務教育の中学は知識を身につけるためにあり、部活のためにあるわけではない。）

部活の担当教員の半数以上が「できればやりたくない」とアンケートにも回答している。

理由は中学教員は多忙であることと、休日がなくなること、そして当該競技の素人であるからである。

一部専門家も存在するが、朝練等の負担により授業中に寝てしまうと言う弊害が指摘されている。

部活中心で過ごした者が、中学の夏で引退を余儀なくされ、高校受験に集中できるのかということかなり難しい。

これが現実であるのに、部活、部活で、テコンドーの才能をもつ選手が辞めてしまうのは遺憾である）

無差別級、軽量級いずれも激戦であるが、

無差別級では、関西大会で優勝した本多 尊（滋賀彦根テコンドークラブ）、

軽量級では、湘南大会で優勝した三富朝日（湘南平塚テコンドークラブ）がやや優勢である。



本多 尊

今年は優勝する！



三富朝日

日頃の練習の成果を出して、大会ではいい成績をおさめたいと思います。

組手小学生男子無差別級（選抜・推薦5名）

男子の弱体化が社会問題化している最中、少年部組手試合ほど強い男子を育てる環境はない。

型のみを行っても男子が力強く成長することはない。

ルールに基づきながら弱い自分を知り、弱さを克服する過程で強い精神力が涵養されること疑いがない。

2016年度、関西大会で優勝した小学生組手ランキング1位の中道孝汰（東京城南テコンドークラブ）が優勢である。



中道孝汰

優勝する為全力で戦います。